

展景

季刊

No.121



Spring 2026

目次

野良猫シロ〈短歌〉	梅津純子	4
正月〈短歌〉	小野澤繁雄	6
春動く〈俳句〉	新野祐子	8
ジヨコビッチ〈短歌〉	布宮慈子	10
〈那須通信 66〉あわいの時	加藤文子	12
〈薫風颯々 40〉流水	神村ふじを	16

対詠「こぎげんいかか？」	PART 97	小野澤／梅津／布宮	18
前号作品短評A	20
前号作品短評B	23
無二の会短信	26
編集後記	30

今号のイメージ／ウコギ

野良猫シロ

梅津純子
すみこ

離^{さか}り住む老父母訪へば野良猫が姿を見せぬ小^ささき白毛の

林の中の一軒家なる里の庭に野良猫幾匹徘徊すらし

白猫が餌場寄らむに大猫の唸り声上げ飛びかからむとす

白猫をあはれと父が棒をもて大猫庭より追ひ払ひしとふ

日をおかず現るるらし白猫はボス猫追ひし父頼るがに

「あの猫の両眼は金と青色だ」老いたる父はちよつと得意げ

正月に帰省せる折戯れに野良猫シロに食べ残し与ふ

唸り声にみれば昨日の白猫が鼠を銜へ吾を見上ぐる

残飯を与へし場所に鼠置きシロが正座す礼にきたるや

帰る吾を見送る父母の後ろには野良猫シロも現れ座る

正月

小野澤繁雄

元日もごごともなれば沼畔はバドミントンをしている家族

こどもいてついてきている犬もいる初の稽古かテコンドー道場

ウルトラマン60年の系譜読む一生の記念に切り抜きをしぬ

大きな車になってゆくこの家に子ども育ってその段階に

鉄棒も遊具のひとつ小学校遊具カラフルむかしとちがう

年越してここの花壇も冬の花さいしょからまた育って小花

手不足でてんぷらができぬ張り紙はうどん屋さんかつ営業昼のみ

かたまつてほぐれぬままの矮鶏たちに数えきれぬと記して日記

歩き出てみち育心会ワイエスの世界のようにポプラ廃屋

水路にも枯れ草とみて水草かながれのなかにストーリー幾つ

春動く

春隣ノスリ腹ぺこでもしやんと

『出稼ぎの時代から』出版を記念する八句
本売れぬ時代に本を多喜二の忌

冬座敷椅子テーブルにかつての若人

炭つげばマンガローブ材と箱に

新野^{にいの}祐子

「村どうする」議論に負けず寒雀

主役にならなかつた人々に冬虹立ち

熱爛やごごえし夜々を忍びては

菜っ葉服脱いで野の人手櫛引く

鉦脈の新たな切羽春動く

白鳥帰るペン友という愉しみも

ジョコビッチ

布宮慈子^{やまご}

たまに行く鍼灸院の本棚に置かれゐるノバク・ジョコビッチの本

世界的テニスプレーヤーのジョコビッチ時々バテる試合中に

映像にジョコビッチのゲーム観てある人が言ふ問題は食事と

ゲーム中に倒れてしまふジョコビッチはセルビアの栄養学者と出会ふ

グルテンを含まぬものを食べてからノバク・ジヨコビツチ強くなりたり

冷たいもの摂らないといふジヨコビツチが朝起きて飲む常温のみづ

朝食に二匙のマヌカハニー、ナッツ、果物を摂るといふジヨコビツチ

それならばわれは地元のはちみつを茶匙に一つジヨコビツチ真似て

眠れぬとき瞑想するとふジヨコビツチのストイックさは東洋的なり

注目する全豪オープン決勝にノバク・ジヨコビツチ二十二歳に屈す

あわいの時

加藤文子

数日で新年を迎える。

毎年つくる松飾りは、門柱に設しえた。お正月休みを利用してたずねてくれる姪を迎える準備も整った。神棚のしめなわ、お札も新しくして、ひと通り年末おこなう用事は済ませた。

あとは各部屋のカレンダーの入れ換えをするばかり。

洗面所に掛けていた十二カ月分が一枚に印刷されたR・GREYのポスター大のカレンダーも、最終になった。R・GREYはNさんが三十八年間営んでいらした宮古市にある洋服店。

一月から日を追って小さな字で書き込みをしている。外出や来客などの予定を用事別に色分けをして丸く囲んだり、終わった日は横線を入れてみたり、刻まれた一年が見渡せる。

一月から十二月までの十二段が横に並んだ数字をみると、一年で何て短いのだろう、あっさりしたものなんだ、そんなふうに思えてくる。



月ごとに捲るカレンダーとは趣がちがう。

近年洗面所にはR・GREYのカレンダーが定着していたのだが、閉店されることになり今年が最後になった。

毎年Nさんのセレクトした写真や絵でカレンダーが制作されてきた。「日々の中にある小さな幸せを甘受して……。」など、英語で添えられた短いメッセージも効いている。Nさんが選びぬいたお洋服同様、どれもおしゃれでカッコ良くて、印象的だった。まさにアートだ。

毎日自分を確認するような気持ちでながめていたカレンダーの景色がなくなるのは、名残惜しい。次からはどんなカレンダーを掛けよう。

通り奥まった所にある水道設備屋さんも仕事を納めたようで、行き交う工事の車もなく、静かだ。犬の散歩の人が時々通るくらいで、ひっそりしている。

やり残していることはないかしらと思いつつ、微かに白い空気の立ちのぼる温室でゆっくり水やりしている。長年一緒に暮らしてきた植物たちが、今さらに頼もしく思えたり……。

ジョウロで瓶の水を汲む音、どこか遠くで機械を回す音、冬の風が作る木立の音、そんな音の中で過ごす一年の終わりの数日が好きだ。



生命の集合 カタヒバ リンドウ 源平小菊 スミレ 紫エノコロ
盆養年数 30年 / 鉢の径 9cm

流水

神村ふじを

流水は仲春の季語。海水が凍って氷の塊となり、やがて割れながら海を漂い、主に1月下旬から3月下旬にかけてオホーツク海沿岸に押し寄せる。

中川イセは1901年(明治34)、山形県東村山郡千布村(現天童市)に、父今野安蔵、母サタの三女として生まれた。父親は根っからの博打うち、母はイセが数え年2歳のときに亡くなった。

学業のよくできたイセだったが、貧困の極みであったため、11歳で家を出て、子守り、女中奉公、芝居小屋の下働き、製糸工場の女工と、様々な職を転々とした。ある時、妻子持ちの祭文語り
に騙されて暴行され、18年(大正7)に17歳にして女兒を出産、未婚の母となった。

翌19年(大正8)、北海道に渡り、網走の遊廓に入った。根っからの開けっ広げな性格もあり、一時は遊郭一の看板遊女となったが、牧場経営者である中川卓治に身請され結婚した。

戦後、女性の参政権が認められ、「学歴のない女でも選挙に出られる」との言葉に発憤し、市議

選に出馬、女性初の網走市議会議員となった。その後、7期28年に亘り市議会議員を務めた。

イセの最大の功績は、網走の上水道の敷設である。網走のどこの水もアンモニア臭が強く、主婦たちは洗濯にも炊事にも難渋していた。当時の網走の年間の一般会計予算は1億6千万円だが、試算された費用は約3億円に上っていた。イセは東京の日本鋼管と直接交渉し、自分の牧場の持ち馬150頭を担保にすることを提案。さらに「網走の子どもたちの将来のために命を懸ける」と畳みかけた。このイセの必死の決意に日本鋼管側が折れ、交渉が成立した。

50年（昭和25）、網走市の人権擁護委員に就任し、女性解放運動に携わった。自身の遊郭での体験から、女性を惨めにさせることは、イセにとって許しがたいことであった。その後、全国人権擁護委員連合会婦人問題委員として、全国規模の女性問題にも取り組んだ。

一時は遊女になるまでに落ちぶれたイセ。そこから這い上がる強靱な精神力と体力。まさに女性の地位向上の手本になるような人生だった。

68年（昭和43）、彼女をモデルにしたドラマ「流水の女」がTBS系列で放映された。

呻くかに流水の音湾を占む 藤原照子

参考文献…水戸部浩子『山形の女』（1994年、「山形の女」出版委員会）

対詠 じぎげんいかが？ PART 97 〈2026〉

N U O
小野澤繁雄
梅津純子
布宮慈子

校庭の広さのなかで児の少な低学年か大波小波

1月27日 O

新年歌会不調に休めば名物の鯉の甘煮が三杯届く

1月31日 U

くるみとふ猫に会ふため計画す東京行きの「つばさ」の時刻

2月3日 N

おばあちゃんがいて車椅子猫もいるという家族観NHKにも

2月5日 O

白猫の写真出で来ぬふるさとの老父母の庭に抛りぬしノラよ

2月16日 U

春めいて気温上がれば消えてゆく雪なり庭と畑あらはる

2月23日 N

梅園は傾斜地なれば見下ろして見上げてもして紅もいろいろ

2月27日 O

あと二十日残雪願ふ二月尽沖繩からの孫迎へむと	2月28日	U
春かなと思へど白し昨朝の雪よ覆へよこの全世界	3月5日	N
お天氣に上り坂なるないような今日下り坂低気圧きて	3月9日	O
さういへば三寒四温だったつけカーテン繰れば三月の雪	3月9日	U
あちこちと出歩くうちに春が来て今日は彼岸の中日である	3月20日	N
人に話して何か違ったことのように歩き仲間に兄の死のこと	3月26日	O
急死せる友のアパートのドアにうさこちゃん人形在りし日のままに	4月13日	U
片付けの最後に残る雛人形その行方はおぼろげとなる	4月20日	N
これ以降新型がない車でもそれにのりおりさいごの車	4月24日	O
二台目の車は軽のハスラーにて荷物をいつぱい積んで走る	4月27日	N

前号作品短評A 〈小野澤〉

●地蔵尊参りの案内きてをれど場所も何も知らない わたし

布宮慈子

前々号の作者一連タイトルは「地蔵まつり」で、今号は「村社めぐり」。一連はその首尾。事情、やりとり、動きをよくさらっているような一連。参りは、訪れておがむこと。村社を検索してみると、神社の旧社格の一、郷社の下、無格社の上に位する、とある（コトバンク）。ここから社格、郷社、や無格社なども検索することになった。

この歌（一首目）、導入歌としてはいい感じ。知らない わたし。以降、区内の活動になるか、九人のグループができて、区長さんも含まれた（六首目）。このへんのながれは同号編集後記に詳しい。

古文書や歴史に詳しくふさはしき人をり鈴木勲^{いさを}先生

先生はコースを考へ念入りの資料も用意してゐてまづ挨拶す

ふさはしき人、そういう人はいますね。この二首目、してゐて、で繋げているところ。読み手もそこに参加しているような感じ。もう少し具体が次（々）。熊蔵は、作者の曾祖父（布宮熊蔵）のよう。

熊蔵の建てたる馬頭観音は屋敷神なり話に出で来

天気よく皆しやべりつつ（一連さいごの歌）、地元根付いた（根付こうという関心・）活動が、交流の機会にもなっている。

●嘴と眼でいっぱいの顔を向け三羽四羽とダチョウ寄り来る

大橋千佳子

嘴と眼でいっぱいの顔、がなんともリアル。ダチョウ、世界最大の鳥、空を飛ぶことはない（でささない）、走る。それが三羽四羽と寄り来る、どこから？

ヤドカリもいて（二首目）。仲秋は、名月や農作物に関連付けられることが多いよう、ここでは潮だまり。一連を通して七十余年を過去とするひとの生活（現実）感。叔母さんだったりする（三首目）。スローフードを作りだめする（四首目）。

スープ鍋の湯気を味わい徐おもむろに換気扇回す初冬のキッチン

およそ勝手仕事（キッチン）がみぢか。ある種のこまやかさがある。

干し柿は気が揉めるのも一興で 陽当たり、落下、洪は、カビはと

「おしたじ」は母の古びた言い回し女房言葉と知るや知らぬや

女房言葉、語頭に「お」を付けて丁寧さをあらわした、など。ここでは、おしたじ。したじ（醬油）の丁寧語になっている。

遠ざけて安穩だったまた人と関わる仕事断れずおり

この歌には、心に当るものがある。カレンダーに予定があるのがいやだという女性がいて、ベンチ仲間。じぶんもそうだった。

前号作品短評B 〈慈子〉

●上板も下板も中板までも遊びのように十八歳のわれ

小野澤繁雄

鉄ちゃんである作者のことだから、何か関係しているだろうと推測した。上板は上板橋かみいたばし（駅）、下板は下板橋しもいたばし（駅）、中板は中板橋なかいいたばし（駅）か。東武東上線の駅で、上板橋のほかは普通列車しか停まらない駅のようだ。

東京の人以外は、なかなか読むのに苦労するかもしれない。話し言葉では何でも略すから、上板、下板、中板となる。この三つの駅の周辺で、十八歳の作者が暮らし、行動していたという感慨が伝わってくる。

駅キャラというものがあり鶴見駅のトイレでしりぬつるつく

ワンマンで三両編成鶴見線兄が通いし線に今日乗る

十五分はいられるというそのホームホーム目の前船がつづいて

鶴見駅の公式キャラクターは「つるつく」らしい。そのことを駅のトイレで知った作者。なんでもないことだが、最後に置かれた「つるつく」に興味が湧く。調べてみたら、駅員の格好をした漫画チックな鶴であった。

また、鶴見線は「国道駅」や「海芝浦駅」などと並ぶちよつと変わった駅を有する都会の秘境線だという。作者のお兄さんが通勤で使った線として、そこに思い入れがある。十五分いて、戻るまでの間に、通る船を眺める作者。何を思ったかより、その時間を楽しんでいるのだ。

●柿くらい食べさせて 仔熊撃たれる

新野祐子

昨年の秋は、熊の出没に揺れた年だった。しかし、作者は動物のほうにも心を寄せる。柿を食べに来た仔熊を撃たねばならない猟師もいるわけだが、食べさせてやってもよかつたんじゃないか、と思う。自然と人間のあり方を問う一句となった。

きりふすま
霧襖のけぞるほどの注文受く

70は働き盛りすさまじや

ネズミ捕るイタチに歓声むかな

詞書に「小さな餅工房にて三句」とあり、年末に向けて大車輪で餅をつくる仕事を続ける様子がかがえる。「霧襖」は、霧が濃く襖のように見えるさまを表す秋の季語。ネズミを捕るイタチにも歓声が上がったようだが、極度に疲れが出てくると些細なことでも反応することがある。そんな極限状態のことかもしれない。

狐のだます私でいたい目を濡らし

謀略や策略に満ちた世の中であっても、自分は自分と納得する作者。心の中に清いものをもって
いなければ、いい句は詠めないだろうと思う。

無二の会短信

◆「ごきげんいかが」の二月十六日に詠っている猫について。三十年ほど前、宮城県の登米市に晩年を過ごす老親を、折々訪ねていました。いつの頃からか白い野良猫が父母の家の広い庭に姿を見せていました。父が言うには、広い屋敷周りには何匹もの野良猫が現れていて、白猫を虐める大きい猫を父が追い払ってやったとのこと。盆に帰った時一度私が残飯を与えたら、次の日鼠を銜えてきて、前の日餌をもらったところに鼠を置いて座ったのです。その姿は、昨日のお礼と今日もくれという様子でした。数日後、山形に帰る私を父母が見送っていると、白猫は何処からともなく現れて父母の後方に座って見送っていました。この金色と青の目をした猫はオッドアイといい、幸運を呼ぶ神秘の目と言われるとのことです。忘れ得ぬ美しい白猫でした。

梅津純子

◆一日の朝、家事（洗濯やごみ出し）のあとの散歩が大事になっている。日中の（夜も多く）一人暮し、それで、少ない外出の機会にもなる。コースはその日次第、天気情報が必要、冬晴れの日がつづいていたが、二月下旬になって、天気が変わりやすくなった。花粉の飛散もある。趣味でもある。先回、散歩は趣味だろうか？ AIに聞いたら、その可能性がありますが、という。もう一つの

趣味、短歌ももうこの散歩中にしか詠まなくなった。一日に平均して六首程度詠む。散歩はまた花をみるためでもあつて、コースもときにそのためになつてゐる。蠟梅も十月桜も一町内に一軒程度でみることができるよう。花は、その季節を楽しむことでもある。子どもに（ときに赤ちゃんにも）あう、しる犬にあう、これも大きな楽しみ、だ。

小野澤繁雄

◆三寒四温とはよく言つたもので、立春を過ぎてから暖かくなつたり寒くなつたりの日が続く。娘二人はすでに嫁ぎ、しばらくお蔵入りしていた雛人形だが、女の子三人の孫に恵まれ、また飾ることにした。この飾る作業がひと苦勞。飾ろうにも人形の位置、小物の配置、まったく記憶がない。ネット頼りに一日がかりで何とか飾つてはみたが……。片付けと来年のことを思うとまたひと苦勞である。「これは右それは左と雛飾る」

神村ふじを

◆去る二月二十三日、白鷹町内で『出稼ぎの時代から』の出版を記念する集いを開いた。四年前、同タイトルの映画を仲間たちと制作した。その一時間の映画には盛り込めなかつたことが多すぎるという監督の強い思いを汲んで、同じ仲間で本を作ることにした。約一年半後の昨年九月に出版することができた。自分たちで祝賀するのもおかしいので、今回「出稼ぎを語り、戦後八十年・高度経済成長から六十年を経た現代」について語つてもらおうと企画した。五十名を超える、大学生か

ら九十歳の方々の参加を得た。三十代の大学の研究者が三名おり、このマイナーなテーマに大いに
関心を持っていることを知り、とても元気づけられた。映画を観た大学生の感想文も紹介してくれ
た。現在日本にきている大勢の外国人労働者とかつての出稼ぎ者を重ねて考えている若者は少なく
ないようだ。グローバル化のただ中に置かれているのだから。六十年前の出稼ぎは過去のことでは
ないのである。

新野祐子



編集後記

◆冬から春にかけての今号は、やはり冬の作品が多い。正月に関するものもある。季節は確実に移ろい、山形も春になった。とはいうものの、中東での武力行為がひどくて停戦の合意もなされないままである。ガザの悲惨さが霞んで見えるほどだ。満開の桜を目にしても気分は晴れない。

◆三月半ばに集まりがあつて、二年ぶりに東京へ行った。東京駅に降り立った途端、目にしたのは大勢の外国人の姿だった。ただでさえ混雑する東京駅で、外国人が大きい荷物をゴロゴロ引きながら歩いている。もちろん日本人もゴロゴロと引いていて、家族であれば離れてはならじと子どもを叱りながら必死に向かつて進んでいる。駅構内の様子に圧倒され、あらかじめ決めていた店での昼食を諦めて目の前の店に入ることにした。昼にしては早い時間だったので、空いていてゆっくり食べることができた。

目的地は表参道。地下鉄（東京メトロ）で行けばよいと思つたが、地下鉄路線図は頭からすっかり抜けている。路線案内を見た。時間はたっぷりある。丸ノ内線に乗り、途中で銀座線に乗り換えればいいのだなと思つていたところ、「銀座線乗り換え」のアナウンスに瞬間的に降りてしまった。そこは銀座駅だった。あれーっ、なんか違う。遠い昔にこの路線で通勤していたばかりに、

知っているつもりがよくなかった。赤坂見附のほうが同じホームでの乗り換えになるので都合がいいのだ。また丸ノ内線に乗り、赤坂見附で銀座線に乗り換えた。久しぶりの銀座線の車両は黄色に塗り替えられていた。ホツとして吊革につかまっていたら、エクスキューズミーと声をかけられた。わたしに席を譲ろうというのである。見るからに高齢者であろう、リュックも背負っている。ありがとうと座らせてもらった。表参道では出口をしっかりと確認して、無事に会場へ着いたのだ。ことほど左様に、東京は便利といえば便利だが、煩雑な街である。

また、山形へ帰るときのこと。東京駅のホームから見える光景は、どんどん高層ビルを建てている様子ばかり。まるで壁である。エキナカで目当ての弁当を買い、車窓を眺めながら食べようと楽しみにしていたのだけれど、期待したほどの味ではなかった。わたしはもう既にこの街を構成する住人の一人ではない、そう思いながら東京を後にした。

(布宮慈子)

muninokai.com

113号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊「展景」
121号

二〇二六年四月三十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形県西村山郡河北町谷地蔵

info@muninokai.com

Copyright © 2026 MUNINOKAI. All rights reserved.